

【高崎学検定講座】

於 市民センター・ソシアス 市民ホール

2024 年 7 月 20 日（土）

鈴木 英恵

高崎の山車行事 ～地域の人びとがつくった歴史と民俗～

【概要】

本講演のタイトルは「高崎の山車行事」である。この名称は平成三一年（二〇一九）二月に高崎市指定重要無形民俗文化財として指定を受けたときのものである。旧高崎地域の山車を持つ町内では、祝賀や記念日を迎えるとその喜びを表す方法として、地域の人びとが山車を曳き街中を練り歩いた。

主な祝賀を例にあげれば、国レベルの祭典である大正四年（一九一五）の大正天皇即位式、昭和三年（一九二八）の昭和天皇即位式、昭和一五年（一九四〇）の紀元二千六百年記念行事である。市レベルでは高崎が新たな段階へと移行するときに、その発展を祝って山車を曳いた。その主な出来事は、戦後の早期復興を願って一年早い昭和二四年（一九四九）行った市制五〇周年記念、昭和三六年（一九六一）の市制六〇周年記念、水道創設五〇周年記念、昭和三六年の群馬音楽センター落成記念などである。当時、各町内では山車や小正月の道祖神屋台を曳いて祝った。山車を持たない町内はこれらの祭典に合わせて、新たに山車を製作した。

高崎地域の人びとは国レベル、市レベルでの祝賀や記念日があれば、それを祝しその喜びを共有したいという思いがあったからこそ、山車を巡行させたのである。これが高崎の山車の民俗であり、高崎の山車行事なのである。

はじめに

高崎の夏を彩る最大のイベントが高崎祭りである。高崎まつりは①大花火大会②神輿渡御③高崎山車まつりの３部門で構成される。令和六年（二〇二四）時点で第五〇回目、八月二四・二五日の二日間にわたって催される。高崎まつりの歴史を振り返ると、その前身は昭和五〇年（一九七五）に開催された第一回「高崎ふるさと祭り」である。この祭典を企画計画したのはＪＣ（高崎青年会議所）で市民による手作りの祭りであった。昭和六〇年（一九八五）になると「高崎まつり」に変わり、第一一回「高崎まつり」として引き継がれた。

ここでは、まず高崎の山車行事に着目し、古くから地域の人びとに受け継がれ、創り上げてきた高崎の山車の歴史と民俗を述べる。その上で、高崎の山車行事に関連する民俗として、御神体として祀る山車人形、山車を曳く人びとにとって重要な首にかける木札などを取り上げる。過去から現在にわたって伝承されてきた山車巡行に欠かせない民

俗を明らかにしてみたい。

1. 高崎まつりの原点とその歴史

(1) 山車巡行の民俗

昭和五〇年に創られた「高崎まつり」を一言でいえば、神仏の信仰に基づいたものではなく、市民が参加して楽しむことを目的とした祭典である。明治三三年（一九〇〇）に市制を施行した高崎市は平成一二年（二〇〇〇）に市制百周年を迎えた。平成一五年（二〇〇三）には新たに高崎山車まつりが加わった。高崎街中を練り歩く山車巡行は高崎山車まつりの華で、地域の人びとが主役となる瞬間である。とくにお囃子の叩き合いは山車の見せ場で、たくさんを見物客が見守るなか力強い音色を響き渡らせる。



高崎駅前に集結した山車
(高崎市高松町)2018年8月4日撮影



砂賀町の山車とエビスの人形
(高崎市砂賀町) 2018年8月4日撮影

令和六年は第二二回高崎の山車まつりが行われる。例年、高崎山車まつりは輪番制で山車を所有する南・東地区、北・中央地区の各町が毎年交代で山車を曳く。高崎の山車の数は、南地区（一三台）・東地区（七台）・北地区（九台）・中央地区（九台）の計三八台で、市域で保有する数としてはもっとも多いとされる。令和六年、高崎まつりは半世紀の節目を迎える。地域の人びとが世代を超えて手を取り合い、楽しむ都市の祭典として定着してきた。

高崎では前述したように、古くから祝賀や記念日を迎えると、地域の人びとが街中を山車巡行した。たとえば、大正四年一〇月の大正天皇即位式、昭和三年一月の昭和天皇即位式には、各町内で山車や道祖神屋台が多く曳かれた。山車を持たない町内は、この二つの祭典を祝おうと、新たに山車を製作している〔高崎市編 一九九六 一一～一二〕。大正二年（一九一三）から昭和三年一〇月までの一五年間で、祭典に間に合うように山車を新調した町は二六町もあった〔高崎市編 一九九六 二二〇～二二一〕。

第二次世界大戦以降も、高崎地域では特別な出来事や記念行事があると、地域の人びとは山車巡行をさせ、その喜びを体現した。市制五〇周年記念を祝おうと、一年早い昭

和二四年に市制五〇周年記念を祝い、昭和三六年の市制六〇周年記念、そして水道創設五〇周年記念、昭和三六年の群馬音楽センター落成記念などがあった。

（２）創られた高崎ふるさと祭り

令和六年の「高崎まつり」は、八月二四、二五日の二日間にわたって行われる。以前は八月第一週の土・日に開催していたが、現在は八月下旬の土・日に移行している。このように地域の人びとが楽しむ祭典だからこそ、まつりを担う人びとの考えによって、開催期日の変更もある。

高崎まつりの前身は「高崎ふるさと祭り」で、第一回は昭和五〇年（一九七五）八月一七日・一八日に行われた。高崎ふるさと祭りの歴史を紐解くと、その主催者は高崎青年会議所のメンバーであった。「市民による手作りの祭り」をキーワードに、あらゆる世代が楽しめるような工夫がみられた。まつりを組み立てるにあたり、当時の高崎市域に伝承されてきた民俗の数々であった。たとえば、民俗芸能（神楽や獅子舞）、花火（高崎市根小屋町の鹿島の七日火）、各町が保有する山車巡行などを詰め合わせ、世代を超えて伝承されてきた高崎の民俗だけで構成されていた。

まず、昭和五八年（一九八三）開催の第九回高崎ふるさと祭りのパンフレット（高崎市教育委員会所蔵）から、まつりの内容を見ていきたい。パンフレットの大きさはB4判二枚の両面で「伝統ある高崎山車行列」と大きな文字で書かれる。山車行列の開催期日は八月六日（土）午後六時半より、七日（日）午後四時半よりと二日間で、計二八町内の山車が行列を組んだ。このときに出た山車を地区別にみると以下のとおりである。東地区が羅漢町、旭町、田町四丁目、九蔵町、北通町、中江木町、中央地区では新紺屋町、赤坂町、常盤町、並榎町坂下、柳川町、寄合町、連雀町、田町（一・二・三丁目）、南地区は八島町、通町、新町、若松町、新田町、南町、和田町一丁目、下和田町、北地区が本町一丁目、本町二丁目、本町三丁目、並榎町、成田町であった。当時のパンフレットに「各町内の山車の説明」として、各町内の山車人形の写真とその説明文だけが載る。山車が製作された年やお囃子のことなどの情報は無く、山車そのものよりも山車人形に関心が高かったようである。下記で、中央地区常盤町を例に人形の説明文を挙げてみたい。

- 〔9〕 常盤町 牛若丸。五条橋で弁慶とたたかう牛若丸は下和田町の人形にもある。この品行は東京日本橋鼈甲斎清秀の作。稚児姿に生絹（すずし）をかざし腹巻をつけている。山車の手摺の上に浮かぶ姿はなるほど橋の欄干に見立てられよう。上段の幕に波を現してあるのは加茂川の水の意であろうが、下段の幕に孔雀の羽根を開いた姿を移してあるのは物語とはかかわりなく、妍を競う、美しさ、効果をねらったものであろう。五十六年十二月に消失したが五十七年十月に復元された〔伝統ある高崎山車行列 第九回高崎ふるさと祭り実行委員会山車部門 昭和五八年〕。

高崎ふるさと祭りでは、山車行列だけではない。七日（日）の午後一時から五時まで、市内随所で大八木諏訪神社獅子舞の披露、同日午後二時から三時まで進雄神社神楽が特設ステージで行われた。高崎市内の民俗を組み合わせ、創り上げたまつりであった。

（３）終戦後における高崎地域の祭り

ここでは、終戦後に実施された高崎地域の主な祭りをみていく。過去の祭りは、商工会議所がかかわる商業祭がみられた。昭和二〇年初頭から昭和三五年ごろまで高崎祇園商業祭が行われ、昭和二八年ごろからは神輿渡御も行われた。昭和二九年に高崎奉納祭がはじまり、全国煙火競技大会や高崎音頭手踊、相撲大会、模型飛行機大会、獅子舞の奉納、山車巡行などが行われた。昭和三〇年に五か村合併記念として、高崎まつりを開催した。そして昭和五〇年に高崎ふるさと祭りが行われた。これは郷土芸能祭りを意識したもので、高崎地域の民俗を盛り込んだ祭りであった。昭和五〇年代には鹿島の七日火を花火として位置づけた。

【昭和 20 年から同 30 年代にかけて】

◆高崎祇園商業祭

年代：昭和 23 年（1948）ごろ～昭和 35 年（1960）ごろまで

時期：毎年 7 月 8 日から 12 日ごろ

主催：高崎実業組合連合会、後援：高崎市と高崎商工会議所の後援

祭祀：高崎神社境内の八坂神社

⇒昭和 28 年（1953）から神輿渡御

神輿担ぎ：若衆

⇒当番制で毎年担ぎ手が変わった。

柳川町（昭和 28 年）→赤坂町（昭和 29 年）→本町二丁目（昭和 30 年）・・・

◆高崎奉納祭

年代：昭和 29 年（1952）

時期：毎年 10 月中旬の 2 日間（15、16 日ごろ）

主催：高崎市・高崎商工会議所・高崎実業組合連合会

祭祀：群馬県護国神社の例大祭が中心

花火の開催：昭和 29 年（1954）「全国煙火競技大会」（全国の花火師を集めた）を開催。

⇒烏川沿いで、大々的に花火大会を行った。

内容：演芸会、芸妓による高崎音頭手踊、相撲大会、剣道大会、柔道大会、模型飛行機大会、獅子舞の奉納、山車巡行

【昭和 30 年（1955）ごろ】

◆五か村合併記念（新高尾・中川・長野・八幡・豊岡の 5 村との合併を記念）

高崎まつりを開催⇒高崎奉納祭の特別版

・昭和 32 年（1957）➡ 花火大会で事故が起こって規模が縮小される。

【昭和 50 年（1975）ごろ】

◆第一回 高崎ふるさと祭り（市民参加型）

⇒市制 75 周年記念で開催。当時、オイルショックの影響もあって市では山車行事を中止にする予定であったが、市民は山車巡行を希望していた。その結果、市民の手作りのまつりが行われるようになった。

・ J C（高崎青年会議所）が郷土芸能祭りを計画し、第一回高崎ふるさと祭りを実施。これが現在の高崎まつりの原型。

⇒郷土芸能（神楽、獅子舞）と山車巡行を行う予定であったが、台風の影響で山車巡行は中止。

・ 第一回 高崎ふるさと祭りのイベントとその内容

⇒子どもの広場、盆踊り、花火大会、山車行列、郷土芸能、群馬交響楽団の演奏会、お茶席、中高生の作文コンクール、花火大会。

◆花火大会（子ども花火）

・ 音楽センターの中庭で、子どもが小さな花火を行うだけであったが、昭和五〇年代に市内根小屋町の鹿島神社に伝承する「鹿島の七日火」をふるさと祭りの花火として、群馬音楽センターの前で行った〔高崎市編 一九九八 一四〕。

《参考文献》

高崎市編 一九九八 『高崎市史民俗調査報告書 第 6 集 旧市域の祭りと町内会 ―現代の祭りとその背景―』 高崎市

2. 高崎の山車行事における「山車」の起源とその歴史

（1）頼政神社祭礼に登場した飴屋台

高崎まつりを彩るのは、華やかな山車巡行である。近年、高崎山車まつりで各町の山車を見ると、工夫を凝らして山車を装飾していることが窺える。たとえば、住吉町では山車に LED ライトのネオンを取り付けることで、山車全体が明るくなった。暗闇で光り輝く山車は幻想的で、まつりをより一層盛り上げる存在になった。山車の装飾技術の高さには目を見張るものがある。住吉町だけではなく他の町内も必要に応じてくり返し改変している。

次に、高崎の山車巡行の歴史を紐解いていく。高崎の山車にかんする記録に『更生高崎旧事記』がある。これを著したのは、明治時代の歌人・郷土史家の土屋老平（一八一二～一八八七）である。土屋は明治一五年（一八八二）に高崎城下における各町の由来とその位置、高崎地域の主な社寺縁起、高崎城下町の祭礼行事をまとめた。同書によると、頼政神社の正月神事（正月二五日・二六日）の祭礼時の二六日に飴屋台が出たとの記録がある〔高崎市 一九六八（一八八二） 五〇二〕。高崎城主として元禄八年（一六九五）に高崎城に入った大河内輝貞が、祖先の源頼政を祀り建立したのが頼政神社である。

高崎の祭りですいつ頃から山車巡行が始まったのかは定かでないが、この飾屋台を山車巡行の起源と考えるならば、近世以来からの歴史といえる。

表1は『更生高崎旧事記』に記録された、明治二年（一八六九）正月二六日の頼政神社祭礼時に登場した屋台の飾り物を一覧である。屋台の数は二四で、屋台の飾りものは幟や人形であった。幟は新田町・南町・住吉町・高砂町の四町で、そのほかの町内は人形で、福神のエビス・大黒、布袋合三、長寿を意味する海老や高砂夫婦など縁起のよいものが好まれた。明治二年から現在まで同じ人形を使用しているのは連雀町の桃太郎、歌川町の藤原定家である。当時の飾り物は、鶏、月に芒、海老など、縁起のよいものばかりであった。これらの人形を載せた屋台には梶取が無く、屋台の上に飾り物だけを設置した形態であったようである〔高崎市 一九九六 二一三〕。

**表1 明治2年(1869)1月までの頼政神社(道祖神之祭)
における飾屋台について**

No.	町名	屋台の飾り物
1	本町一丁目	浦島
2	本町二丁目	猩々
3	本町三丁目	布袋合三
4	嘉多町	弁慶
5	相生町	恵比寿
6	四ツ谷町	大黒天
7	住吉町	幟
8	常盤町	鬼若
9	歌川町	定家卿
10	寄合町	猪之早太
11	中紺屋町	鞍馬山僧正
12	鞆町	鶏
13	元紺屋町	海老
14	白銀町	鉾幡杵付
15	連雀町	桃太郎
16	赤坂町	万年猿
17	田町	高砂夫婦
18	九蔵町	金時

19	高砂町	幟
20	新町	旧高砂夫婦、御幣又三番冠
21	南町	幟
22	通町	浦島太郎
23	砂賀町	月に芒
24	新田町	幟

土屋老平 1968（1882）『更正高崎旧事記』『高崎市史 第3巻 資料編』高崎市、504 頁より作成。町名の並び順は、高崎市編 1996『旧市域の祭りと町内会 現代の祭りとその背景』高崎市、220～221頁に準ずる。

（２）頼政神社の道祖神之祭

前節では、『更生高崎旧事記』から明治二年（一八六九）正月二六日に行われた頼政神社祭礼時の屋台の飾り物をみてきた。山車と屋台に載せものは、人びとを魅了させるようなものであった。ここでは正月二六日の頼政神社の飴屋台を出発点に、時代を遡って大河内家文書の無銘書から頼政神社の祭礼の始まりを確認する。大河内家文書の『高崎史料集 大河内家文書（無名書1）』（高崎市歴史民俗資料調査員会編 一九八六 高崎市教育委員会）を手掛かりに、頼政神社の由来や同神社の年中行事をみていく。同書の冒頭に「頼政神社史料」があり、本文中に高崎藩主の大河内輝貞が没した後の戒名「天休院殿」が出てくる。これが書かれたのは延享四年（一七四七）以降とされ、頼政五五〇年忌供養を終えた後とされる〔高崎市歴史民俗資料調査員会編 一九八六 序文〕。

頼政神社の祭礼のはじまりは、元禄一二年（一六九九）の正月一四日の道祖神之祭であった【資料一】。鞘町を中心に、町から子どもが来て賑やかな祭りであったようだ。翌年の元禄一三年（一七〇〇）に道祖神之祭の日程が正月二六日に変更されたが、この年から大明神の神輿も出て祭にかかわる祭器も調い、盛大に行われるようになった。しかし、大河内輝貞が越後国村上に転封したことで頼政神社は廃れた。その後、享保二年（一七一七）に再び大河内氏が高崎城主になったのを機に、伊勢の森と呼ばれていた現在の高崎公園に接する場所に頼政神社を建立し、神社の祭典を再開させた〔土屋 二〇〇一 四五〕。

頼政神社の祭礼にかんする資料に「頼政神社御祭礼御行列列

【資料一】『無銘書一』

一 御祭礼之始ハ、元禄十二年乙卯正月十四日道祖神之祭にて、鞘町童子、御社江来ニ寄り町々より来遊ふ、甚賑ふ
一 元禄十三慶辰年正月より、道祖神之祭二十六日ニなる、此年より、大明神之神輿渡候事となりたり、御祭器調ふ

〔高崎市歴史民俗資料調査員会編 一九八六（一七四七） 高崎市教育委員会 二〕

之絵図面」(年代不詳)がある。この絵図は『新編高崎市史 資料編8 近世4』の口絵カラー写真(高崎市編さん委員会編 二〇〇二 高崎市)に掲載される。

(3)『高崎町方私記』からみた道祖神祭礼

つぎに、山車の意味合いをみていく。『高崎町方私記』は町方役所の例規集で、自寛永七年(一六三〇)至文化十一年(一八一四)の町方の法制が集録される。表題は「町方式」で、その内容は高崎宿、倉賀野宿の人口数や寺社支配に関する事項「一、一 御役所定」から「七十七、一 浅間之宮御修復之事」までである。「六十三、一 年中行事」に町方の年中行事が記録される。

【資料二】は道祖神祭礼の町方役所への届出である。子どもたちが台の上に太鼓を載せ打ち鳴らす。初市が正月七・八・一〇日と日をずらして行われ新町、本町、田町の順に市が立った。新町、本町、田町では牛頭天王神前に幟や燈明が置かれた。本町では寛政二年ごろまで、飾り物や子どもたちがお囃子等をした。道祖神祭礼の最終日である一四日には、羅漢町の法輪寺で湯立獅子舞が行われた。〔高崎市歴史民俗資料調査委員会 一九八八 四六七〕。

『高崎町方私記』によると、寛政二年(一七九〇)前から、子どもが太鼓を台の上に載せて叩き、本町では飾り物や子どものお囃子が行われていたことである。

【資料二】『高崎町方私記』

- | | |
|-----|---|
| 六日 | 一 明七日方道祖神祭礼ニ付、町々子供台付太鼓
一 町内限牽為打候段、届出、承知「候事」 |
| 七日 | 一 新町初市ニ付、天王神前幟燈明差出候旨町役人并真福寺方も申出、承知、見廻り同心
遺ス |
| 八日 | 一 石上寺并修験四人御札差出、寺社之部ニ委敷 |
| 十日 | 一 本町初市ニ付、七日夕方牛頭天王神前江新町ニおなし
但 先年寛政二年迄飾物小供囃子等いたし候有之 |
| 十四日 | 一 田町初市ニ付、本町・新町ニおなし 但 同断 |
| | 一 惣町松葉燈ニ付、其場所之見廻り町同心差出ス、「寺社之部ニ有之」
一 羅漢町法輪寺道祖神祭礼ニ付、湯立獅子舞有之、同心出ス |
- 〔高崎市歴史民俗資料調査委員会編 一九八八 四六七〕

3. 年中行事史料「閭里歳時記」にみる道祖神祭礼

(1) 今日につながる山車の姿

ここで、年中行事史料から山車に関連する記述をみていきたい。安永九年（一七八〇）、高崎藩士であった川野辺寛が高崎の城下町の年中行事をまとめた「閭里歳時記」がある。

【資料三】は「閭里歳時記」の正月七日の項である。道祖神祭礼は正月七日から同月一四日の朝まで行われた。冬場の道祖神祭礼では、子どもたちが小さい車の上に太鼓や小太鼓を載せ、笛や銅拍子などでお囃子を奏でながら街中を歩く行事があった。このことから山車や屋台の前身の姿は、小さい車や台の上に太鼓を載せて叩いていたものだと考えられる。

(2) 年中行事のこと

毎年同じ季節にくり返しめぐって来る祭りや行事のことを年中行事という。日本における年中行事は、稲作農耕を基盤に展開する。四季を通じて農作物の生長（種蒔きから収穫を終えるまで）を軸にした神祭りの行事がある。祭礼行事の日は、地域社会の人びとの生活と深く結びつくことから、年中行事の日は労働の休み日でもあった。

神社祭礼を例にすると、春季例大祭は五穀豊穰を願い、神を楽しませるために獅子舞や神楽を奉納する。地域によっては、神楽の演目に稲作の順調な生長を願うもの、養蚕の豊穰を祝うものなどがある。秋季例大祭も同様で、農作物の豊作と収穫を神に感謝する。

柳田國男は『年中行事覚書』のなかで、年間365日のうち約300日は普段と変わらぬ日々を過ごす日常的な時間と述べ、残りの約65日は特別な食事を食べ、晴れ着を着て過ごすことから、日常とはまったく異なる非日常の時間であると指摘する。年中行事の日は、季節の節目にあたる日でもある。これを節供と呼ぶが、古くは折り目ともいった。節供の供は「供する」の意味で、神に捧げた物と同じ物を人が共食する意味がある〔柳田 一九七七（一九五五） 五～一四〕。

節供は季節の折り目で、節分の古い呼称をセツガワリ（節替わり）といった。一年間に、立春・立夏・立秋・立冬と節替わりが四回あるが、これらは季節の移り変わりの節目である。

【資料三】『閭里歳時記』

一月七日

一 今日より十四日の朝まで、町々の童共集て、太鼓・小太鼓を小き車に載せ、笛吹き手同拍子などにて林、町内を遊戯ごとアリ。之道祖神の際なり。道祖神の事十四日の下に詳也。前レ共各一町を限あつまりて、他町と混同する事をせず。又十二日、三日の頃、町々の童共道祖神の御祝と大声に呼で、あたり武士屋敷をめぐる。武家より祝儀とて扇子・烏目などとするなり

〔高崎市編 二〇〇二（一七八〇） 四八一〕

（３）祭礼の特色

高崎まつりや高崎山車行事で祝賀や記念日を祝い、地域の人びとが山車を曳くが、この光景は多くの見物客を楽しませている。華やかな祭礼は多くの人を魅了するが、柳田國男は『日本の祭り』のなかで、祭礼の特色を以下のように述べる。

祭礼の特色は、神輿の渡御、これに伴ういろいろの美しい行列であった。中古以来、京都などではこの行列を風流と呼んでいた。風流はすなわち思い付きということで、新しい意匠を競い、年々目先をかえて行くのが本意であった。〔柳田 一九九四（一九四二） 二四七〕

祭礼は神輿渡御をはじめ、さまざまな美しい行列を伴うものであった。風流は、美意識が高く雅なものという意味である。目先を変えて人びとを驚かすように、毎年新しい意匠を生み出すことが重要であった。祭礼には多くの見物人がやって来るが、その存在については以下のように述べている。

日本の祭の最も重要な一つの変わり目は何だったのか。一言で言うと見物と称する群の発生、すなわち祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的な立場から、この行事を観望する者の現れたことであろう。〔柳田 一九九四（一九四二） 二四八〕

本来、祭礼は信仰を共にする人びとの間で行われていたが、そこに見物人が加わることで、祭礼に華やかさや審美的な面を見出すようになっていったのである。

４．高崎の山車行事における山車の民俗 —山車人形・お囃子・木札—

山車で重要なのは山車を曳く人、山車の上部に飾られるご神体としての人形、そしてお囃子を奏でる子どもたちの存在である。ここでは、山車の民俗をキーワードに、山車に欠かせないものを取り上げていく。

（１）御神体としての山車人形

高崎まつりが近づくと、各町内では公民館や空き店舗を利用して祭典事務所を開く。ここに山車人形を御神体として祀る。たとえば、高崎市新田町の祭典事務所開きは七月二二日で、愛宕神社の宮司が事務所内の御祓いをしてくれた。この日に山車人形（浦島太郎）を出す。人形の着付けは婦人部がする。山車人形を御神体として祀り、町内の人々が御神酒や果物を供える。祭りの巡行責任者は、頭である。代々頭を務める家は決まっている。山車囃子は、オオダイ（１）、キンダイ（３）、鉦（１）、笛６人前後である。お囃子で一番難しいのはオオダイで、小学生の高学年が担当する。笛は秀山流で、少し笛のペースが速いことに特徴がある。キンダイは入ったばかりの子が叩いている。昔は小

学生以上でなければ山車に乗ることができなかった。小学生のときから継続して笛を吹く男子高校生は以前、少年科学館で行われた笛の講習会に参加し、練習を続けた。笛の講習会の情報は人伝で知った。笛の覚え方は、まず「見て盗め」という。笛の持ち方や指の押さえ方などを覚える。山車囃子の太鼓の数は限られているため、キンダイとオオダイは順番で練習をする。小学校低学年は膝を叩いて山車囃子のリズムを覚える。



御神体として祀る浦島太郎の山車人形
(高崎市新田町) 2018年7月31日撮影



山車囃子の練習 オオダイとキンダイ
(高崎市新田町) 2018年7月31日撮影

(2) 木札の役割と機能

高崎まつりで、各町内の山車の曳き手や関係者が首にかけているのが木札である。この木札には神名、梵字、神印ほか、町名やお囃子の秀山流や長谷川流など、さまざまな絵や文字が刻まれる。町内や組織の単位で同じ木札を持つことで、同じ一員であることを証明した。

お守りとは、木片や紙に神名、神印を書いたものである。御札は家の内外に貼るため住生活、お守りは身につけるため衣生活にかかわった。木片や紙の状態でお守りを持つのは困難なため、袋に入れる守袋ができた。その普及には社寺参詣の影響があった〔福田 一九八六〕。



首に付ける木札

迷子札を伝世民俗資料(民具)と遺跡出土資料(考古資料)の面から考えた角南は、迷子札には迷子防止と護符の二つの性格があることを指摘した。近世における迷子札は、幼児が身につけるもので、木製あるいは金属製の小判型であった。これは他人に迷子であることを知らせるために身につけ、札の表面に干支、仏像の姿、仏像の(種類)と名称が刻まれ、裏面に子どもの名前、両親の名前と住所が書かれていた。迷子札には迷子防止と護符の二つの側面があったが、もともとの護符から時代が経つにつれて認識票へと変化していったと述べた〔角南 二〇一八〕。

この木札はお守の機能、さらには同じ木札を持つ者同士の仲間意識を醸成させつつ、他の町内や組織と区別するものであったと考える。

まとめ

最後に、高崎の山車行事についてまとめてみたい。高崎地域では、各町が山車の巡行を行うときは、大きく分けて二つある。一つ目は国レベルでの祝賀（大正天皇即位式や昭和天皇即位式、紀元二六〇〇年記念など）、二つ目は高崎における市レベルでの祝賀（市制六〇周年、市制一〇〇周年、音楽センター落成記念、高崎まつりなど）である。つまり、国レベルで歴史が変わる日、高崎地域の市レベルでいえば高崎にとって新たな歴史が刻まれるときに山車巡行をする。これら二つのレベルに共通することは、歴史を変えるような喜ばしい事態が生じた場合に、山車を曳いたことである。山車行事が過去から現在にわたって受け継がれてきた理由は、山車囃子が継承されてきたからである。山車囃子を次世代に伝えていくことこそが、山車の民俗的意義を後世につなげることができると思う。

《参考文献》

- 高崎市編 一九九六 『高崎市民俗調査報告書第6集 旧市域の祭りと町内会 現代の祭りとその背景』 高崎市
- 高崎市史編さん委員会編 二〇〇二 「閭里歳時記」『新編高崎市史 資料編8 近世4』 高崎市
- 高崎市史編さん委員会編 二〇〇四 『新編高崎市史 民俗編』 高崎市
- 高崎市歴史民俗資料調査委員会編 一九八六 『高崎史料集 大河内家文書（無名書1）』 高崎市教育委員会
- 高崎市歴史民俗資料調査委員会編 一九八八 『高崎史料集 藩記録（大河内）1』 高崎市教育委員会
- 土屋老平 一九六八（一八八二） 「更生高崎旧事記」 高崎市史編さん委員会編『高崎市史』第3巻 高崎市
- 土屋喜英 二〇〇一 「高崎まつりと山車」『高崎市史研究』10号 高崎市
- 角南聡一郎 二〇一八 「迷子札考 一護符から認識票へ」『近畿民具』四〇号 近畿民具学会
- 福田博美 一九八六 「守袋の変遷 懸守から胸守へ」『文化女子大学研究紀要』一七号 文化女子大学
- 柳田國男 一九九〇（一九四二） 「日本の祭り」 『柳田國男全集』13巻 ちくま文庫
- 柳田國男 一九七七（一九五五） 「年中行事覚書」『定本 柳田國男集』第十三巻 筑摩書房